昭和55年11月1日発行

佐保会兵庫県支部だより

第４号

佐保会兵庫県支部事務局　神戸市北区緑町５－３－21
〒651－12 ☎(078)581－5727

（インフォメーション神戸所長）林利三郎氏画

同窓会は心のふるさと

元支部長　田中菊枝

○○中学三回生同期会ご案内（卒後二十八年…アノいがぐり頭とオカッパが某月某日全員集合）という弾んだ案内状が届いた。お待ちしています。ぜひお越し下さい。――で結ばれたハガキに目を通しながら、三年前のこの人たちの卒後二十五年の集いに思いが走る。

齢四十を迎えると、ふるさとを恋うることしきり、というか、百名を越す旧生徒たちが西から東から集まった。卒後初めて会う顔にも声にも思い出が甦る。遥か東から馳せ参じたK君、感慨深く、高校のクラス会は「共に学んだ同志」という感があったが、中学の同期会は「共に生きた奴ら」の思いが深い。と、ポッツリ言った。戦後の厳しい社会を生き抜いたこの人たちは、何時かホッとした時、イガグリ頭の、オカッパの友を思う。集まってみると皆同輩である。肩書きはいらない。昔の子どもにかえって話は尽きない。わがフル・サト・の思いが胸一杯に拡がっている。今までの苦難の道を乗り越えて来た人生の、爽やかさを味わうところとも言えようか。この風景を黙って見ているだけで私の胸一杯に幸せが満ちる。こうなると教師も又、里帰りした人々の仲間とも言うべきか。

佐保会の集いでも同じような事が言えよう。お互日頃は疎遠であっても、年令も二十代から八十代と巾広い層の集合体であっても、一堂に会すれば誰彼なく話が通じる。年令の隔りがあっても、そこに母校の歴史、変遷を知る。仕事の、研究の、趣味の話等々尽きることがない。社会的な地位など忘れて話すことが出来る。そこに爽やかさがあり、フルサトの温かさがある。だから私は努めて佐保会の集まりに出席する。思う存分語り尽すもよし、黙ってひとの話に耳を傾けるも又、味のあるものである。

どうぞ皆さん、佐保会の行事に進んでご参加下さい。きっと、後味の良さを噛みしめながら、のびやかな歩調でアスファルト道を歩む自分を見出すことでしょう。

（昭9・理）

旨味へのアプローチ

高木幸子

食物の味覚は、人間の五官（視、触、嗅、聴、味）が働いて感じられるものである。そのために食味は複雑であるから一口には表現できない。直接舌に感じる味の種類だけでも甘・塩・酸・苦の四原味と旨・辛・渋のほかに七種があるといわれている。この中には味覚だけではなく嗅覚因子が介在している味もある。これらの味が単一ではなく重なりあっているので的確に表現できないくらいであることを日常の食生活で経験している。しかしこの味の中の基本味すなわち原味と言い得る味は表現できるはずである。その原味が各国とも甘・塩・酸・苦の四原味は共通しているが、その他の味は一致していない。日本では四原味に旨味、辛味を加えて基本味といっている。また旨味を原味に加えない学者もある。欧米、中国、インドでは旨味を原味に加えていない。

日本人が旨味を求めて魚介類に塩を加え放置して魚醤（ぎょしょう）をつくり始めたのは飛鳥時代以前であったと聞いている。ただ塩味だけで満足しなかった日本人の知恵で旨味をつくり出した例である。カツオブシ、干しシイタケは、すでに平安時代に用いられたようである。日本の食生活の歴史上からも、また味に敏感な日本人の経験上からも食味になくてはならない基本味として旨味は原味と私は言いたい。

旨味の化学的研究の主流は、アミノ酸系旨味物質と核酸関連物質系の旨味物質の研究がある。そしてその研究の領域としては旨味物質の化学構造の開発である。もう一つの領域は、実際の食品からの旨味物質を引き出す方法であるように思う。前者の領域における研究は荒井、藤巻両氏の化学総説誌のご執筆で知ることができた。L－グルタミン酸のβ－水素の一つを水酸基で置換する場合、スレオ型になるように置換すれば旨味はむしろ増強する。また興味深いのはγ－カルボキシル基をスルホン酸基で置換すると旨味の強さが倍増する事実である。核酸系では5′－IMP（イノシン酸）と5′－GMP（グアニル酸）を化学修飾すると旨味強度はどのように変るかの研究である。化学構造と旨味の関係を踏まえて、旨味をもつ誘導体の開発が行われた。現在のところ最も強力な誘導体はフルフリルメルカプタンを導入した5′－IMPで現在の5′－IMPの旨味強度の十七倍であると発表されている。そしてこれからの研究として広く食品中に存在するペプチドの呈味効果の研究は食品の微妙な旨味を解明する重要な鍵となることで、大きな期待が寄せられている。

一方、食品からの旨味をどのようにして引き出すかが調理学を担当するひとりとしての課題である。〝おいしい〟と感知する食品についての旨味成分の追求をささやかながら続けている。旨味成分を官能的に感知するにはその物質を水で溶解して溶液状であると感じやすいが、固体状であると感じにくい。筆者は〝おいしい〟と感知する食品エキスの化学分析と官能検査、すなわち機器と人間の味覚との両方からの研究が必要であると考えている。旨味ないし呈味成分の量的なバランスや精巧な分析機器の開発に伴い見い出される成分の研究であると思う。

昔、平凡なコンブのだしのとり方に二方法あることを疑問に思ったことがある。多くの調理書は、(A)水にコンブを入れて沸騰直前にコンブを取り出す方法になっている。一方、大阪の有名な料亭の主人は(B)ぬるま湯にコンブを入れて沸騰直前にコンブを取り出す方法である。疑問を持った当時はアミノ酸自動分析装置は普及していなかったので、高圧沪紙電気泳動法を用いて(A)と(B)の抽出液中の遊離アミノ酸を検討した。(A)は最初の水温を十五℃とし、(B)は水温三十五℃と四十五℃とした。コンブ（根端部）抽出液中のグルタミン酸、アスパラギン酸量は(A)より(B)のほうが多いという結果を得た。味覚テストの結果は(A)は厚みのある旨味を、(B)はさわやかな旨味を感知した。その原因は、粘質物アルギン酸の溶出が(A)に多く、(B)には少ないということが影響したのではないかと推察した。このようなことから調理の種類により、たとえば清汁と煮物のだしの出し方の使

いわけが必要であることを痛感した。

次に5′—AMP（アデニル酸）の味について、つけ加えておきたい。最近中国料理の湯（たん）の材料となるホタテ貝の干貝柱や干エビ（芝エビ）エキス中の核酸関連物質に興味を持った。従来より貝柱の旨味成分としては主としてコハク酸があげられている。しかし一方、清水氏らはコハク酸は貝類のニュアンスを与えるにすぎず主としてモノアミノ窒素が味の主因であると指摘している。筆者は干貝柱の濃厚な旨味にはコハク酸などの有機酸やアミノ酸のほかに、5′—リボヌクレオチドが関与していると推察し、イオン交換クロマトグラフィならびに高圧沪紙電気泳動法によって干貝柱エキス中の5′—リボヌクレオチドを分離定量したところ5′—AMP、5′—GMPが存在し、その中でも5′—AMPが最も多く含まれ、三%抽出液百mℓ中に一二三・九mgという値を得た。5′—IMPは見当らなかった。これは干貝柱には5′—AMPを分解して5′—IMPを生成するAMPdeaminaseが存在しないためであろうか、干貝柱の5′—リボヌクレオチドとしては5′—AMPの形で干貝柱中に蓄積されている。干エビエキス中には5′—AMPと5′—IMPがほぼ同量で一三mg前後含有していた。干エビの場合はアミノ酸とベタインが旨味に大きな影響を与えていると考えねばならない。

次に5′—AMPについて官能検査を行なってみた。パネル一一四名を選出し、試料は〇・一%5′—AMP溶液と純水との比較官能検査の結果は一%有意で5′—AMPに旨味を感知することを認めた。5′—IMPとグルタミン酸の相乗効果は周知のことであるが、5′—AMPとグルタミン酸の相乗効果は一%有意で顕著であることを認め、予想以上の結果であった。この5′—AMPの旨味を裏づける研究に佐藤氏の研究がある。ラット味受容器をグルタミン酸と核酸関連物質の混合液で刺激した場合の鼓索神経応答という論文がある。これによると相乗効果の大きさは、5′—AMP〉5′—GMP〉5′—IMPの順で5′—AMPが最も著しい相乗効果を示していると報告している。5′—AMP単一液は5′—GMP、5′—IMPに比して呈味力は弱いと感知するが、グルタミン酸との相乗効果を著しく示すのは非常に興味深いことである。

一般に5′—AMPはよく知られてはいるが、5′—IMPの呈味力についても見直したいものである。お恥しい研究の一端しか述べられませんでしたがお許しいただきたい。なお、この拙文は「臨床栄養」に投稿した一節であることをおことわりしておく。

武庫川女子大学（昭18・家）

歌人素性（そせい）のこと

蔵中スミ

「百人一首」の「いまこむと言ひしばかりにながつきのありあけの月を待ちいでつるかな」（あなたが今直ぐ行きますとおっしゃったばっかりに、唯でさえ夜の長い九月—陰暦十月—の明け方近く、有明の月が出てしまう頃まで、あなたのお出でを待って夜を明かしてしまったことですよ。）という素性の歌は、来る筈の人を待ち佗びる女心の恋と恨みを流れるような調べの奥に包み込んでいます。これは素性が女の立場になって詠んだ心情表現の歌ですが、『古今集』にはまた、叙景歌として分り易い「見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」という歌もあって、柳・桜をこきまぜた都の景色を春の錦に見立てたところに新しい趣向があります。

「百人一首」を撰んだ藤原定家は素性の歌に心を寄せていた一人ですが、その歌論書『近代秀歌』では、遍昭・業平・素性・小町の名を挙げて「慕ふべき古き姿」をこれらの人々の歌に求めようとしています。遍昭・業平・小町は「六歌仙」に数えられている人々ですが、素性はこれらの人々よりは一世代あとの歌人ですから、年代的には「六歌仙時代」と「古今集撰者時代」の中間に位置する歌人と

みた方がよく、二つの時代の橋渡し役に任じていた歌人といえましょう。

素性は遍昭の子ですが、遍昭には「天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよをとめの姿しばしとどめむ」という五節（ごせち）の舞姫を詠んだ華麗な歌があります。三十五歳で出家する前の作です。出家以前は、仁明天皇の側近として蔵人頭を勤め官廷で羽振りをきかせていましたが、天皇崩御を機に出家し比叡山で修業を積んだのち、霊験あらたかな高徳の僧として活躍したと伝えられています。出家した遍昭は、「法師の子は法師なるぞよき」（『大和物語』）と言って子供達も出家させてしまいました。それ故、素性の出家も幼少の折のことと思われます。素性の兄由性は、父遍昭の弟子として仏道修行に励み、延喜六年（906）に少僧都になっています。由性の没年は延喜十四年（914）、七十四才でした。素性が格別仏道に励んだということは伝えられていませんので、僧としてよりは歌詠みとして精進したということでしょうか。

素性の歌は『古今集』に三十六首はいっています。入集歌数の多いことでは、撰者である紀貫之・凡河内躬恒・紀友則に次ぐ第四位で、集中に数ある歌人を圧倒し去っています。撰者の中でもリーダー格であったとみられる貫之の素性に対する評価が高かったこともその理由とされています。

遍昭・素性父子は出家しましたが、その一族、良峰氏を名乗る人々は男女共に宮廷の一員として然るべき官職についていました。それは、遍昭の父良峰安世の功績によるところが大きいと考えられます。桓武天皇の皇子として生まれた安世は臣籍に降下して良峰氏となりましたが、学者として又漢詩作者として業績を残し、官廷では異母兄弟の平城・嵯峨・淳和の三代の天皇に重用され、安世が大納言正三位で亡くなった時には、従二位を贈り、嵯峨上皇は挽歌二篇を作ってその死を悼んだということです（『日本紀略』）。

雲林院親王（うりんいんのみこ）は嵯峨天皇の孫にあたります。御父仁明天皇崩御の折に出家されたのですが、同じように出家した遍昭とは親しく、亡くなられる前に雲林院を遍昭に付嘱されました。雲林院はもと淳和天皇の離宮で、山中の幽邃な場所に広い土地を占め景色のよいことで知られていました。雲林院親王（常康親王）在世中は、素性も遍昭に伴なわれて親王の許を訪れることがあったのでしょう、『古今集』に次の歌がみられます。

うりんゐむのみこのもとに、花見に北山のほとりにまかれりける時によめる

いざけふは春の山辺にまじりなむくれなばなげの花のかげかは

（巻二・95）

親王が漢詩集『洞中小集』をまとめられたことは、菅原道真の『菅家文草』に「洞中小集序」が収められていることで知られます。詩集の題が示すように、雲林院の奥深い一角に居を定めてひそやかな生活を送って居られたのでしょう。雲林院には世離れた風情が漂っていたように思われます。素性の歌人としての歩みは、この雲林院にかかわる人々と共に始まりました。そこでは政権争いに背を向けた人々を中心としてささやかな集いが持たれ、隠者の文学と呼ぶにふさわしい作品によって人々の心は慰められていたのでした。

親王薨去の貞観十一年（869）以後、遍昭の僧としての地位は次第に高まり、やがて仏教界の重鎮となります。素性もまた歌人としての名声があがり、はやくも貞観年中に二条后藤原高子のために、大和絵の屏風に歌を添えるなど、和歌を通じて宮廷との接触が頻繁になっていったように見受けられます。

寛平年間に宇多天皇の後宮で催された歌合には素性も出詠していますが、この時期には宇多天皇の意を体して『新撰万葉集』（菅原道真）・『句題和歌』（大江千里）のように和歌と漢詩を取り合せた趣向の作品が見られるようになり、かつて嵯峨・淳和天皇の時代にさかんであったような、漢詩文集を勅命によって撰進するのとは異なった傾向があらわれています。最初の勅撰和歌集『古今集』撰進に先立つ十年ばかり前のことです。

宇多天皇は寛平九年（897）に退位されましたが、この頃素性も洛北の雲林院から大和の石上（いそのかみ）にある良因院に移ったように思われます。昌泰元年（898）十月、宇多上皇の宮滝御幸の折に、素性は召されて一行に加わりまし

た。この時に上皇は、素性を指して「和歌の名手」と言って居られます。宮滝御幸は、素性の和歌によって花を添えられたようで、素性にとっては歌人としての面目を施した旅になりました。そしてこの時には、菅原道真が都から上皇に随って居りました。道真には旅中の漢詩と和歌があり、帰京後『宮滝御幸記』を書きました。道真は承和十二年（845）に生まれていますが、推定によると素性はその前年位に生まれています。この二人は年令的には近かった訳です。

石上の良因院に移り住んでからの素性は、かって青年時代に雲林院で経験したような静かな生活に戻ったのでしょうが、その後も都との交流はあったようで、宮中で歌を詠み、屏風に歌を書くということも、一度ならずあったと記録は伝えています。

素性の没年も明らかではありませんが、延喜十年以後、六十五歳位で世を去ったように思われます。季節は春だったのでしょう、紀貫之と凡河内躬恒が素性の死を悼んで哀傷歌をとり交わしています。

素性うせぬと聞きて躬恒がもとに贈る　貫之

石上ふるくすみこし君なくて山の霞は立ちるわぶらむ

かへし　躬恒

君なくてふるの山べの春霞いたづらにこそ立ちわたるらめ

とあるに又　貫之

消えにきと身こそ聞えめ石上古き名失せぬ君にぞありける

（付記）

小著『歌人素性の研究―平安初期和歌文学の世界―』を桜楓社（東京都千代田区猿楽町二―八―十三）から近刊の予定です。（昭22・文）

家庭裁判所の調停

芳賀和喜

昭和二十四年、家庭裁判所が各地に発足しました。御存知のように、新憲法の施行により今までの約束事やしきたり等がくつがえされる時代になり、家族生活が変化し、それにつれて家族内にいざこざが起った時、その相談と解決を求めてゆく所が家庭裁判所なのです。家庭裁判所は家事部と少年部とに分れ、家事部では家事調停委員が選任されております。私は昭和二十四年に大阪家庭裁判所の調停委員に選任されました。

さてどんな問題が申立てされているかと申しますと、例えば離婚にしましても、従来は何らかの理由はあるにせよ、妻が殆んど追出される形で泣き寝入りするほかなかったようですが、今日では、調停離婚として、夫と妻のどちらからでも申立てが出来るのです。当事者が申立てをすると、担当の判事、調査等の必要の為の家事調査官、この事件を依頼される調停委員（二人か三人）が決まり、調停日と調停室が決定されます。調停の話合いは、調停室でだけ行われ、ここには当事者と調停委員の他に、代理弁護人は当事者の代理として自由に入室出来ますが、親とか兄弟でも、裁判所が必要とする時のみ参考人として入室を許可され、秘密は絶対に守られます。

私が委員になり初めの頃、経験をつまれた委員の指導を受けました。「当事者から聞くだけお聞きなさい。思っていることを全部吐かせないと話が進みません。」と。そう申せば、廊下等で大声でどなっている人もちょいちょいありました。双方興奮状態ですから、何でも話しておきたいのでしょう。調停室で、よく聞くこと自体非常にむつかしいことですが、それが出来ればその相談の半分は解決したといえましょう。とに角離婚を双方が承諾し、慰謝料や、子供の扶養の問題についても双方が承諾すれば、その条件において調停成立、そして調書作成という段取りになります。この調書は、判決と同様の効果のあるものです。万一成立しない場合は、本訴にもってゆく方も多いそうで、中々むつかしいものです。

さまざまの調停から人様々の苦しみに接し、私自身のよい経験になり、反省したり喜んだり、その間講習会や研究会、又老人ホームや離婚による母子家庭等の見学にも行き、三十年近く調停委員として夢のように過ぎ去りました。

思い起せば、終戦後の食糧難の時は、子供に食べさせたい一心からとはいえ、一枚の肉、一個の卵さえ嫁と姑のもめ事の原因となり、とうとう離婚の調停に持ちこまれるという事例もありました。又戦災で家を焼かれた未亡人が、家督相続をした息子も扶養能力がなく、老人ホームに入るのも嫌な為、そ

の日の暮しにも困るという申出に心を痛めた時もありました。

時代も移り、遺産相続の法律の実行も行き渡りました頃、未亡人になった親を誰が引受けるかというもめ事が多くなりました。長男か、或いは次男の家に落着いていられたら問題はないのですが、やはり嫁や孫とうまくゆかず、いわゆるタライ廻しという現象が多くなって参りました。

最近の傾向として、親の方が別居を希望し、結婚により同居する人は少なくなるにつれて、独居老人問題が出てきたようです。これについては、老人福祉法、年金制度等、或いは老人ホーム（有料、無料）ホームヘルパー制度等が次第に整ってきているようです。

結局何れの争い事でも、申立人、相手方の双方が、互に気持を察することが出来るような心境に達すると問題が解決するようです。でもこれは、自分を省みても、言うのは簡単ですが、中々むつかしいことです。

兵庫県では、神戸市尼崎市の家庭裁判所で無料相談が出来ます。

（大8・理）

弔辞

元支部長　八木静子

松岡さん、とうとうお別れしなければならなくなってしまいましたのね。八年も先輩の貴女を先生と申上げないで松岡さんとお呼びすることをお許し下さい。

御一緒に奈良へ、理事会だ、評議会だと出かけたり、親和高校のあの昔の同窓会室をお借りしておお仕事をしたりした思い出の一杯ある貴女には、やはり「松岡さん」とお呼びするのがぴったりなのです。

戦後何もかもが滅茶苦茶になった中で、佐保会兵庫県支部の再建を、或はその発展を、今は亡き小泉ハツセ大先輩を中心に画策した時の貴女が一番鮮明に浮び上って来るのです。

小泉さんが次々に思いつかれるよいアイディアを、貴女はいつも着々と具体化して下さいましたね貴女は地道に息長く仕事をなさる方でした。然もそれはすべて確実でした。貴女なくしては小泉さんのよいアイディアも実現されることはなかったでしょう。

貴女はまた、佐保会の為には全く骨惜しみをなさらない方でした。そのおかげで佐保会兵庫県支部は大きく成長発展を遂げました。これすべて貴女のお力の賜です。その一例はあの「友愛金庫」でした。これは世間で行われている頼母子講にヒントを得て小泉さんが佐保会兵庫県支部の財政的基礎作りの一方法として考え出されたものですが、貴女の着実そのものの運営によって長く続き大成功を収めました。これは支部活動の大きな原動力となりました。ただお金が積立てられたというだけでなく、まさに名前そのもので、加盟者の友愛を大いにはぐくんでくれ、現在の支部に流れる友愛友情の源となってくれたのです。貴女にとっては大変なお骨折であったと推察致していますが、同時に貴女の偉大な功績であることは会員一同の認めるところです。

憶い出します。あの下山手八丁目の電停からの坂を、どんなに喜々として私達が毎月登って行ったことでしたか。あの坂も今はすっかり様変りしてしまいましたね。

この春お会いした時はあんなにお元気でしたのに、秋には早お別れするというさみしい転変のこの世ですのね、でも貴女があんなに心から愛された佐保会はこれからもずっと発展して行くでしょう。貴女が小泉さんを助けていらっしゃった郷支部長時代、小泉さんの跡を引きついで支部長をして下さっていた時代、支部長を退かれてからも支部の長老として、何かと助言を惜しまれず、兼ねて本部の監査役として毎年奈良へ出かけていらした晩年、その何れの時代も貴女の佐保会に寄せられる情熱は少しも変ることがありませんでした。ですから時として佐保会を理解しない会員がある時には心の底から慨嘆されたものです。「奈良あってこそ今日の私たちがあるのじゃないの」とは貴女の口癖でした。貴女の熱情に答えて佐保会兵庫県支部を盛んにせずにはいられません。そうすることだけがあんなに佐保会を愛して下さった貴女へのせめてもの御恩返しなのです。この思いは私一人でなく会員一同の気持だと確信しています。

松岡さん、どうぞ静かにお休み下さい。貴女の心を糧として伸びて来た佐保会兵庫県支部会員一同に代りまして追慕の気持を述べさせて頂きました。

卒業後の歩み

太田孝子

私は、第二次世界大戦のただ中、戦局も次第に急を告げた昭和十七年に奈良特設幼稚園保母養成所を修了させていただきました。

僅か一年ではありましたが、ご親切な先生方のご指導の下で、全国から集まった同じ環境の級友たちや奈良女子高等師範学校の学生の皆さんとご一緒に過ごした日々は、三十八年の歳月を経た今も鮮かによみがえって参ります。戦時中とて物質的にも不自由な時代でしたからつらい面もたくさんありましたが、その一つ一つが今となっては懐しい思い出に外なりません。母校とは遠く離れてはおりますが、テレビ、新聞、佐保会の通知また時折友達との交流等で、古都の情報を知り、常に心の糧としております。

養成所終了後の私は、小学校の教師として第二の人生を歩み始めました。まず郡内和田山町枚田小学校に勤務し、以来、地元山東町内の三校を転勤して二十八年間教壇に立ちましたが、幸い健康に恵まれ、暖かい先生方のご協力を得て大過なく任務を果たすことができました。

昭和四十六年、五十三歳で退職した後は、婦人会関係の仕事に就き、四十八年同会理事及び婦人会指導員として働かせていただき、五十年から二年間は、町教育委員会に勤務し、先生方のご指導を得て、福祉面も学ぶ機会を持つことができました。その間、事ある毎に奈良の学び舎を思い起こし、少しでも社会奉仕に役立てたらと日夜がんばって参りました。

最近は婦人会活動も多様化し、その運営もなかなかむずかしくなりましたが、会員の協力、連帯感の強さで歩んで来ております。

何といっても健康が第一でございますので婦人会活動で緑黄色野菜を作り、収穫した野菜の料理法を研究し、食生活の改善に心掛けています。転作等の大豆から塩分の少ない味噌加工の実習をしたり、農民体操の普及にも努力しております。

昭和五十三年度より、『ひょうご母と子の協会』に入り、その愛育班活動に参加して、「誰もが健康で、家族のみんなが明るくいきいきと暮したい」という目標を念願に微力を尽くしております。

愛育班の母として親しまれた故矢崎きみ代さんは、私の最も尊敬する方ですが、次に『愛育のこころ』について述べられた言葉を引用したいと存じます。

「立派な母親から、よい子が生まれる。よい環境が、その子をつくります。生きることの価値は、人に何かしてあげられることです。奉仕、これは最上の喜びです。人はとかく、忙しい、時間がないと言うけれど、その気になれば時間はつくれます。要はその気になるということです。どんなことをするにも、人の和が大切です。あの子にも、この子にも、行き交う子どもみんなに声をかけ、あるいは手をふれることです。」

このようなふれ合いの中に、親と子、社会と子ども達のあたたかい結びつきが生まれると信じます。

奉職時代は、生徒相手ですので気分も若く活発だった女性も、退職後は何かと引きこもりがちになり、社会との交流も少なくなり易いものです。自分にできる仕事や趣味を生かしたり、進んでボランティア活動に参加して生きがいを見つけることが大切だと思います。

健康に恵まれている私は、郡、町婦人会役員の一人として、右記の愛育班の心を生かし、自分のペースを守って、ささやかながら社会への奉仕に老後を捧げたいと考えています。

そして、それが、遠い昔、古都奈良でお世話になった、せめてものご恩返しと存じます。

佐保会の今後のご発展を心からお祈り申し上げます。

（昭17・特保）

無い袖は振れません

名村　喜久江

新聞の「婦人生活」欄の編集にかかわってきて四半世紀になる。記者として、デスクとして。その間、悩まされたことの一つに、当用漢字、新仮名遣い、送り仮名などの用語用字の問題がある。とりわけオツムにくるのは、当用漢字に、衣、食、住に関する字が冷遇されていることだ。

たとえば服飾の記事。どうも読みづらいといわれるのは、カタカナが多いだけではない。漢字制限が多すぎるのである。脇、袖、裾、衿、身頃はおろか、衣裳、袷、綴る、綾、紐、紬、絣、紗、絽、綺麗、刺繍など、すべて制限外字。これを平仮名に直したり、刺しゅうなどとセパレーツにするから、読みづらいばかりか、意味の取り違えも再三。それを防ごうと句読点をやたらと増やしてみたり。四苦八苦なのである。

食生活でも同じこと。皿、鉢、箸、布巾、串、鍋、椀、味噌、醤油、昆布、惣菜、漬物、抹茶など軒なみアウト。海藻を海草と書きかえるのは、まだ心理的に許容できても、抹茶を末茶と言いかえよ…というのでは、全く世も末。とにかく魚扁の字は鯨（これは魚じゃないのに）だけで、あとはすべて除外とは…。鰆の字に春の訪れを知り、鮎の字に清流を思い、鱈の字に粉雪舞う季節を実感する。弱いから鰯よ、背が青いので鯖なのよ、と教えられ納得してきたわれらの世代には何ともアジケナイ今日この頃。国語審議会のオジさま、オジイさまたちは、袖も衿もない服を着て、皿も小鉢もない食卓で、大根、里芋、白菜など以外は、すべてカタカナでしか書けない野菜を召しあがっているのかな。将棋、残墨、男爵、一尉、殴殺、老翁、遺憾、戦艦などといったオトコ世界と縁の深い字は居住権を主張し続けているのに、暮らしに深いかかわりを持ち、日本文化に陰影を添える字が、閉め出されたままなのだ。国語審議会の「新漢字表試案」などが発表されるたびに、今度こそはと目をサラのようにするのだが、そのつどガックリ。女性の立場からみて、なんともクヤしい限りである。

しかし、事は当用漢字の問題に止まらない。作家、画家、歌人、俳人、棋士、社長、医師なども、女性の場合はわざわざ「女流作家」「女流画家」「女医」「女社長」「婦人記者」などと、ことわり書きがつく。名前を見れば男か女か一目りょう然（近ごろは性別不明も多いが）だし、男であろうと女であろうと、仕事の質で勝負し、評価されるのだから、「女」「女流」「婦人」といった肩書をつける必要はさらさらない。一流人は男…という発想。こんなところにもオトコ社会の反映がみられる。まことに残念だ。

男女平等を促進するために策定された「国内行動計画」が、雇用における女性差別の改善にいささかの前進を示してはいるが、ごく身近な活字の世界にも、男女差別が根づよく生き続けていることを、自戒をこめて、もの申したいのである。元読売新聞記者（昭22・文）

古代の仮面

東　昌子

一隅に及ぶ陽ざしのいろ淡く舞楽
の面の無心の笑まひ

鼻高きは異国の人の面ざしか古き
仮面の彫りはおほらか

蘭陵王の仮面をつけて戦ひし武勇
の王は美男と伝ふ

異形の面あまたおかれてあるのみ
の寂けさ長き時間を満たす

先輩のあとを受けて

浅野晶子

大先輩の小泉ハツセさん（国漢四期）は、神戸の婦人指導者として数々の業績を残された方でしたが、その最後のお仕事に〝神戸市生活指導研究会〟をつくられました。

昭和二十八年のことで、当時はまだ戦後の傷跡がそこかしこに残り、衣食住すべてに不自由で、ことに子ども達の体格も悪く、栄養の改善も急務でした。そこで小泉さんは、神戸市の経済的なバックアップも得て、先づお母さん達の勉強会をはじめられ、その中から指導者を育てて、市民生活の底あげと、さらに家庭生活の合理化によって得られた余力を社会福祉の為にと、有志をつのってはじめられたのがこの会です。

小泉さんが東京へ出られて後、灘神戸生協の理事をしておられた永谷晴子さんが二代目の会長を、そして私が三代目をお受けして今年で十二年になります。

この間、日本の国はおどろくべき高度経済成長を遂げ、所得水準も上昇し、耐久消費財の伸びもめざましく、さらには郊外の団地にはスマートなマイホームタウンが出現して、一見まことに結構な生活が展開されています。

食生活面でも、以前には想像も出来なかったような豊かさですが、過剰摂取、アンバランスによる歪みが、さまざまの形で出てきて憂慮され、幸せそうな核家族の中から、かつて大家族の傘の中でカバーされていた家庭内の問題がもろに浮き上ってきて、若い母親の育児ノイローゼ、子どものしつけ、はては夫や妻の蒸発、離婚の増加、老後の不安等生活の基盤のもろさが目立ちます。

すべての価値観が大きく変化してゆく現代ではありますが、衣食住の課題は人間にとって永遠のテーマであり、子どもの教育の問題、消費者問題など、大勢の仲間と勉強を重ねながら実践を続けてまいりました。

こうして貯えられた力を、少しでも社会の為に役立てることが出来たらと、同和地区の主婦や、母子寮のお母さん達の勉強の手助けを、又夏休みには児童養護施設や母子寮の子ども達と一緒にお料理を作ったり遊んだりする日を、九月の敬老の日には市内の施設に入っていらっしゃるお年寄りの一人一人にお便りを書きます。これは施設長さんから個人的なお便りが一通もこない人が六〇％もおられると伺ったことがきっかけで、もう十五・六年続けております。

数年前からは、病院ボランティアをはじめました。市内の病院二ヶ所に週二回訪れ、おしめをたたんだり、人工肛門をつくったりの単純作業ですが、年々参加者がふえ割り当てに苦労する程です。

これらは形の上では、いわゆる善意の奉仕ですが、実は長年の学習を通じて得た生活観や意識が、人間として主体的に、かつ豊かに生きるために、お互いの連帯感を高めようという意欲の表われであるのです。

同じような気持から、二十数年にわたって積み重ねてきたことの中から、娘たちに…、若い家庭の主婦に、これだけは伝えておきたい、知っておいて欲しいということを一まとめにして「くらしの12ヶ月」「続くらしの12ヶ月」として発行しました所、おかげ様で評判がよく喜んでおります。

こうした事業を続けていくのに、多くの方々の御指導、御援助をいただきました。その巾広い人との出逢い、ふれあいの中で、大学の中だけでは得られない豊かな経験をさせていただき、感謝いたしております。

（昭23・家）

ぬか雨に濡るるともなく立つ鹿の
何思へるややさしきその目
枯芝に憩へる仔鹿耳立てて春の足
音を聴きゐるらむか

――奈良国立博物館にて――

（昭19・文）

新しい仕事

高林幸子

文教地区と言われる垂水の山手、神戸商大に近い星陵台で、英数の塾を専業として、もう三年になります。卒業後すぐにラジオのアナウンサーとしてマスコミに入り、二十年を経た後でした。今でもよく人に言われます。「随分と鮮やかに変身なさったのですね。」これには思わず苦笑してしまうのですが、主人が数学の教室を二つ持っていて、父兄に乞われるまま、五十人余りの英語の御世話をしていた―というステップはありました。でも塾の密集地で確実に実績を挙げ、一人一人の心とかかわって信頼を得て来られたのは、やはり私の中にそういう素地があったのでしょう。そのルートはどうしても女子大です。

私の入学は、丁度最後の女高師の方が四回生でいらして寮では共に生活させて頂いたものでした。まだ学内のあちこちに女高師としてのプライドが満ち満ちて、何か眩しいものにでも触れる様な気持でそういったものを眺めながら、一方では大学なんだという自覚に立って古いものには反発していたと思います。でも朝から晩まで、寮では教育論に明け暮れる毎日でしたから、いつの間にか私の中に一人一人の子供の可能性を引き出すという夢が培われていた事は否めません。

自己を表現、主張出来、常に自己を磨く仕事としてマスコミを選びましたけれど、本当によい勉強をさせて頂きました。二十年の間に職場に結婚、出産という前例を作り、働く婦人の権利を一つ一つ得ながら三人の子供を育てて参りました。先頭を走った風当りの強さを、よい仲間達が次々と守ってくれたのが何より私のエネルギーとなっていました。お手伝いさんがやめるとなると必死で学童保育、保育所運動に加わりました。いつの間にか地域のリーダーにされてしまい、日曜日はいつも狭い我家は集会場、夜遅くまでケンケンガクガクという事も珍しくなかったのです。足を棒にして、役所や地域の実力者に通いつめた事もありました。こんな事は、子供を持って働く方なら誰でも経験なさっている事でしょう。地域に立派な施設が出来、下の子が入学の時、会社をやめると言い出したら、皆さんびっくりなさいました。「これから楽になるのに、どうして？」。その頃私の仕事は、一日の放送送り出しのための秒単位のスケジュール作りでした。パーフェクトでもともとという機械的な仕事の中で、私の心は次第に主人の生徒である子供達の方へ向いて行きました。

毎夏、私の自炊で過ごすキャンプ、二千円あまりの月謝で深夜まで教え込む深情け？等々、子供達は心から喜んで集ってくれました。心と心の通い合う毎日の中にはコンピューターの非人間的な匂いなど全くありません。たかが塾なのに何とセンチなと笑われるかも知れませんが、今、数百の生徒にかこまれながら、我教室では未だに夜は紅茶が出て、深夜にお腹が空けば、ありったけの御飯でおにぎりを作るのです。子供達の瞳の中に、その日の調子を確かめながら、でっかい高校生も下から怒鳴りつけるこの頃です。（昭33・文英）

アメリカ便り

（KANAKO BUCK）
谷口加奈子

私がアメリカに住むようになってから、もう足かけ七年になります。その間に知り合った人々の中で私が最も敬愛する人の生活ぶりをご紹介したいと思います。

その人の名前は、ジーン・ハンチェット。四十五才。小児科医で、大学病院と市の保健所に、掛持ちで週四日勤めています。学生時代から苦楽を共にしたご主人は、大学病院の内科の先生。二人の間には、この夏高校を卒業した長女を頭に、女三人、男二人（双生児）と五人子供があり、かなりな大世帯です。

家の中の仕事の分担は比較的はっきりしているようで、ジーンは買物・炊事・洗濯・掃除を、夫君のジムは家屋・庭・機械類の管理

を受持っています。最終的に財布の紐を握っているのは、どうもご主人のようで、高い品を買う時にはジムの顔色を見て決めるみたいです。

ジーンは週一回、大型のバン(VAN)に乗って、食料品・日用品の買い出しに出かけ、山ほどの買物をしてきます。何しろ家族が多いので、パンの量だけでもすごいです。野菜はほとんどが冷凍品。肉はその週のお買得品をドッサリ買い込んで、冷凍庫に貯蔵します。超大型の冷凍冷蔵庫の上に、業務用の冷凍庫があるから、これほどの買い溜めが可能なわけです。また、パントリーと呼ばれる貯蔵室は、いつも、隅から隅まで缶詰類、乾物食品等で一杯です。

週末に時間があれば、大量に料理して、それを数回分に分けて冷凍します。又時には、朝、下準備をし、オーブンのタイマーをセットしておいて出勤します。帰宅時には、出来立ての食事が待っているという仕掛けです。でも、冷凍食品ですませたり、外食にすることもよくあります。とにかく台所では、男女を問わず、手のあいている人が手伝うことになっています。一番重宝な手伝い手は、何といっても皿洗い器でしょう。

掃除は隔週に一回、お手伝いさんに来てもらいますが、大きな家ですから、それでも手が行き届きかねます。子供達は、各自仕事を割当てられますが、出来映えのほどは、あまり感心できるものではありません。従って、家中あちこちで、埃を目にすることはしばしばです。

勤務中の子供の世話ですが、三才になるまでは、フルタイムのベービーシッターを雇い、家で面倒を見てもらいました。三才から五才までは、大学付属の保育所に終日預け、学校に通い始めてからは、三時から五時過ぎまで、シッター(近所の高校生や大学生)に監督を頼んでいました。子供が大きくなった現在、こうした心配はいりません。子供が病気で登校できない場合など、朝一番にシッター探しに頭を悩まさなくてはなりません。医者といえども、子供の病気には泣かされる訳です。

帰宅後は、子供と共に過ごすことを建前としており、よほどのことがない限り、家に仕事を持って帰ることはありません。夕食時には、子供達のその日の手柄話や失敗談に耳を傾け、誉めたり、注意したり…。時には、帰って来る早々、喧嘩の仲裁をしなくてはならないこともあります。疲れている体には、子供の興奮した甲高い声は、ひどくこたえるだろうと思いますが、彼女はいつも冷静で、声を荒立てたりするところを見たことがありません。週末は週末で、買物、用足し、各種活動への子供の送り迎え、社交等といつも忙しく、あまり週日の疲労回復をしている暇などないようです。これだけのハードスケジュールをこなしながら、常に平静さを保ち得る身体と精神の強靭さに、感服せずにはおられません。

一九七三年の労働省の統計によりますと、五十三%の世帯で主婦が勤めに出ています。又、就労女性人口は一九五〇年から一九七四年の間に二倍になり、全勤労者の五分の二を占めるほどに増加してきました。特に六〇年代から七〇年代にかけ、医師、弁護士、エンジニア等を志す女性が急激に殖えてきていますし、女性の昇進への道も徐々に開けてきています。こうした傾向に伴い、独身に止まることを選ぶ人、三十代の半ばまで子供を産むのを待つ人、家族を置いての単身赴任をも辞さない人など、いろいろあり、女性の職業に対する意識が変ってきているようです。ジーンの生き方は、こうしたキャリア・ウォマンの生き方のごく一例にすぎません。なおこうした女性の社会に占める位置の変化は、将来家庭構造、社会構造に何等かの変革をもたらすかもしれません。

(昭44・文英)

御紹介

松本佳代子

谷口加奈子さんは、英文十七回卒業生。ピッツバーグ大学留学から数え、滞米十年を超える。現在は夫君BUCK氏愛児と共に、コネティカット州にお住い。

日本で身につけた教養をベースに、国際的視野からみた日本観や、米国の地に根を下ろしてみた米国観等、興味ある便りが、同期の私に寄せられましたが、今回は、彼女の友人を通じ、アメリカ女性の考え方生き方の一端がうかがえる手紙を、特に抜すいご紹介させて頂きました。

(44・文英)

今思うこと

山中　美佐子

今年三月に無事奈良女子大学家政学部を卒業でき、佐保会の一会員に加えていただけたことを喜んでいます。

私は伝統あるこの大学にあっては、まだ新しく馴染みのない生活経営学科に四年間籍を置いていましたが、はっきり言って自分でも何を専門に勉強したのか、不明です。経済学あり、社会学あり、福祉関係あり…人に聞かれて返答に戸惑うこともしばしばありましたが、それだけに自分のやりたいことを研究させてもらえたという特典があったように思います。私も卒論のテーマに「社会指標」という、いくつかの学問のカテゴリーに属するものを選ぶことができましたが、今考えると先生方は、自分のゼミの学生に専門外の多種多様のテーマについて質問をされて、さぞかしたいへんだったろうと思います。まあ、これも、少人数の大学でのみ許されることではないでしょうか。

私は現在伊藤忠ファッションシステム㈱に勤務し、社会人の一年生としてがんばっています。何もかもが初めて経験することばかりで、毎日失敗の繰り返しですが…。社会に出てまず感じたことは、学生時代には少ない目上の人に対する応待のむずかしさです。他人との調和を考えながら、与えられた職場・職種の中でいかに自分の能力を発揮し、社会に貢献できるか、ということです。つまり、いかに人間関係をうまく操作するかということです。今は、三ヵ月の見習いも終わり女子社員のひとりとして、職場の雰囲気にも馴れ、自分の与えられた仕事も朧ろ気ながらわかり先輩・同輩の人達とも自分なりにうまくやっているつもりです。大学時代の友人も大半が教師としてがんばっていますが、私は自分で教師ではなく一般企業のOLとして社会に出ることを選んだだけに、後悔することのないように毎日を過したいと思います。最初は、数字ばかり相手に慣れないソロバンを使う仕事なのでつまらないと思っていましたが、自分の発行した請求書によって取引先から入金になっただけで、ほのぼのと喜びを感じるようになりました。ほんの小さなことででもその仕事に喜びを感じる間は、会社勤めが続けられるような気がします。もちろん、今後この考えだけでは甘いということがわかると思いますが、とにかく三ヵ月目の今は先に述べたように感じています。

五月に行われた支部会に出席されている人達もほとんどが教師をなさっているようで、多少圧倒されましたが、私のような反逆児がひとりぐらいいてもかまわないだろうと、やや開き直った心構えでこれからもできる限り会には出席させてもらうつもりです。どうぞよろしくお願いします。

（昭55・家生経）

支部事務局だより

行事（54年10月～55年9月）

●本部会報・支部だより第三号発送（54年11月20日）

●支部だより編集委員の御苦労様会（表彰者のお祝いを兼ねて）於竹葉亭　26名出席（55年1月6日）

●支部総会

議事・映画上映（川口志ほ子姉（昭和19年文卒）原作「二つのハーモニカ」）（55年5月25日）

於バーグ　出席52名（内新卒2名）

◈お慶び

横田スエ姉（昭2・文）最高裁表彰（昭54年10月）

岩下ミツエ姉（昭3・家）

諏訪節子姉（昭6・家）

曽谷愛子姉（昭12・家）

短大教育30周年に当り文部大臣表彰（昭55年5月）

◈訃報

松岡ふさゑ姉（大15・理）元支部長（昭55年10月31日）

◈睦会（60才以上の方々の集い）や方々の地区で、新旧会員の親睦を計る「もより会」が開かれています。

編集後記

田中菊枝姉の御力添えで、林利三郎氏の画を頂くことが出来、有難うございました。

支部だより第四号は、これまでの編集方針を受け、年令的にも、御活躍の方面にも広範囲にと意図しました所、沢山の玉稿を頂きました。不馴れな私共ですが、事務局諸姉の御助力で、発行の運びになりました。活字を少々大きく読み易くしたつもりですが、忌憚のない御意見を事務局までお寄せ下さいませ。

編集委員　吉田俊子　木本英子　横山しづ子　谷沢郁子